

京都大学	博士（文学）	氏名	松江 崇
論文題目	古漢語における疑問目的語の語順変化メカニズム		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>中国史における後漢・魏晉という時期は、政治的・社会的な混乱期であったと同時に、言語面においても上古漢語（殷～前漢）が中古漢語（後漢魏晉南北朝）へと変質を遂げた、重要な転換点の一つでもあった。本論文は、この後漢・魏晉期に生じた変化項目の一つである疑問目的語（疑問代詞或いは疑問代詞を含む統語構造が目的語を担ったもの）の語順変化をとりあげ、そのメカニズムを解明し、さらに関連する諸現象を論ずることを目論むものである。</p> <p>古今を問わず漢語の基本語順はSVO型であるが、上古漢語においては、目的語が疑問目的語である場合は、それと直接的な統語関係を結ぶ動詞・介詞（前置詞）に前置され、SOV型の語順をとるのが原則であった。これが中古漢語以降になると、疑問目的語も動詞・介詞に後置され、他の目的語と同様にSVO型の語順を呈するようになった。この現象が、本論文で言うところの疑問目的語の語順変化である。本論文は、この変化の過程を記述した上で、変化の諸要因とそれらの相互関係を解き明かすこと、さらには関連する種々の言語現象を解明することを目的とする。本論文は、疑問目的語の語順変化そのものを論じたI部（本論）と、関連する諸問題を論じたII部（附論）から構成される。</p> <p>I部・第一章では、古漢語における疑問目的語の語順変化のメカニズムを解明する意義を、漢語史あるいは言語類型論の観点から説いている。第二章では、上古初期（西周）から近古前期（唐初期・五代）の各時期における文献資料について「真実性」「口語性」「均質性」といった観点から検討を加え、主要資料として、上古中期の『論語』『孟子』『戦国縦横家書』、上古後期の『史記』（秦漢部分のみ）、中古前期の『中本起経』『六度集経』（一部を除外）、中古後期の『雑宝蔵経』『過去現在因果経』、近古前期の『遊仙窟』『舜子変』『伍子胥変文』『降魔変文』を選定している。第三章では、中古資料として採用した早期漢訳仏典の資料価値について検討し、完了動詞「已」・人称代詞の複数接尾の分析を通じて、原典言語の影響を受け難い言語現象については、早期漢訳仏典が漢語文法史研究における高い資料的価値を有していることを指摘している。</p> <p>第四章では、上中古間の疑問目的語の語順変化を論じる前段階として、上古中期における疑問目的語の前置現象が、上古中期の目的語前置現象全体において如何なる位置を占めるものかを整理している。具体的には、①疑問代詞目的語前置現象、②「/何/-X」疑問目的語フレーズ前置現象、③否定文における代詞目的語前置現象、④そ</p>			

の他の目的語前置現象という類型に整理した上で、その内実を紹介し、疑問目的語の前置現象（上記①②に相当）は生起する頻度が高く、統語レベルの規則的であったことを確認している。

第五章では、そもそも上古漢語において疑問目的語が何故に動詞・介詞に前置されていたのかという前置現象そのものの発生要因に関する先行研究を紹介している。

第六章では疑問目的語の語順変化に関する重要な先行研究である、馮勝利氏による韻律文法理論に基づいた仮説を紹介・検討している。馮勝利(2000)では、周秦漢語（本稿の上古中期漢語）の疑問目的語前置現象を原始漢語のSOV語順の遺留とみなす一方、周秦漢語の段階ですでに韻律構造上はSVO型の「普通ストレス規則」——普通ストレスが動詞Vの後におかれる韻律構造——が成立していたと考える。周秦漢語では、単音節疑問代詞が韻律の上weak formであるがゆえに、深層構造からの焦点移動により動詞の後ろの普通ストレスのある位置に生起することができず、接語化により動詞の直前に生起したと解釈する。漢代以降になると、大量の二音節の「何N」型疑問目的語（「何＋名詞性形態素」型の疑問代詞目的語）が出現し、これは韻律上のstrong formであるがゆえに、「之」を挟んで動詞に前置されることも、動詞の後ろの普通ストレス位置に生起することも可能であった。そして時代の経過とともに、韻律構造上の要求に一層、適合した後置語順が優勢となり、疑問目的語の語順変化が実現したのだと説明している。このような馮勝利氏の説に対して、馮氏の理論における前提が実際の言語事実としばしば符合しないという理論に内在する問題点を指摘した上で、馮氏の理論では、上中古間における実際の疑問目的語の語順変化の状況を解釈することは不可能であることを明らかにしている。

第七章では、漢語史における疑問目的語語順変化のメカニズムの仮説が、歴史言語学一般において如何なる位置づけになり得るのかを確認するために、他言語におけるOV型からVO型への語順変化メカニズムに関する先行研究を紹介し、そこで如何なる議論が行われたのかを概観している。先行研究を比較的参照しやすい印欧語における語順変化について、「借用」による語順変化のモデルを提示するLehmann(1973)、統語的曖昧性による語順変化のモデルを提示するVennemann(1974)、そして韻律構造の変化と類推による語順変化メカニズムのモデルを提出するLass(1994)の観点と方法とを紹介している。

第八章では、第四章・第六章で述べた上古から中古までの疑問目的語の語順状況に基づいて、①少なくとも中古期までは一貫して動詞に前置された甲類、②実際に語順変化を生じた乙類、③上古後期以降になって出現し一貫して動詞或いは介詞に後置された丙類、という三種類に類型化できることを指摘し、以降の第九章から第十二章において各疑問目的語の語順変化・語順維持のメカニズムを論じるための枠組みを提示している。

第九章では、上中古間に実際に語順変化を生じた乙類のうち、最も早期に語順変化

を生じた禪母系疑問代詞目的語「誰」の語順変化のメカニズムについて、統語的曖昧性の観点から論じている。まず、疑問目的語「誰」が前置を保っていた上古中期では、禪母系疑問代詞「孰」と「誰」による格標示体系——「孰」による主語表示・「誰」による目的語表示——が見出されることを論証し、その背景には、「誰」が二・三項他動詞に前置された「誰+V2/3」という構造において、「誰」が主語なのか目的語なのかという統語的曖昧性の存在があり、それを回避するために、「孰」と「誰」の交替による格標示体系が存在していたのだと指摘する。そして上古後期以降は「誰」が主語にも用いられるようになり、「誰+V2/3」の統語的曖昧性が増加したため、語順により主語と目的語とを標示する手段がとられるようになっていったのだと主張している。語順変化の際、「誰」が兼語動詞・三項動詞の目的語、或いは介詞目的語を担った文など統語的曖昧性が高い文型から後置に転じていることを指摘し、中古以降は、文型に拘わらず、原則的には目的語「誰」が後置されるようになったと述べる。

第十章では、動詞目的語としては近古前期まで一貫して前置を保った「何」などの非禪母系単音節疑問目的語の語順の変遷を論じている。まず、動詞目的語として一貫して前置を保ち得た言語的背景を確認した上で、介詞目的語となった場合に、中古漢語に至って疑問代詞目的語「何」の後置語順が生じる一方、前置語順も併存していることを確認する。そして同じ形態素からなる前置語順型（「何以」など）と後置語順型（「以何」）の介詞句について、前置語順型が固定化の過程を経て一語化し、抽象的な派生的意味を獲得したために、「意味的曖昧性を回避しようとする欲求」に促されて、元来それが有していた意味（当該の介詞と疑問代詞目的語とが統語関係を結ぶことで直接的に得られる意味）を表現する必要がある場合、疑問代詞目的語「何」を後置することにより、前置型と明確に区別するようになったのだと解釈している。

第十一章では、〈事物の種類・性質〉を問う「/何/-X」疑問フレーズ目的語の語順変化を論じている。上古中期では、「之」を挟む形で、動詞に前置されていたが、上古後期にはこの「/何/-X_o +之+V」という目的語が前置された動目構造全体が、「統語形式の構文化による機能の限定」により、専ら反語・感歎といった修辞疑問を表す形式へと変化していったために、〈事物の種類・性質〉について純粹疑問を発する場合には、「/何/-X」疑問目的語が動詞に後置された語順が採られるようになったと主張する。またこの現象に関連して、上古では〈事物の種類・性質〉を問う場合でも非禪母系単音節疑問代詞が用いられることが多く、「/何/-X」疑問フレーズの出現率は低かったこと、中古以降に後置の「/何/-X」疑問フレーズ目的語が急増したのは、語彙の複音節化の趨勢を受け、「単音節疑問代詞の複音節化」が生じたことによると主張している。

第十二章では、「何X」疑問代詞目的語の語順変遷について、出現時期によって分類しつつ論じている。「何物」「何處」「何許」などの大多数の「何X」疑問代詞目

的語は中古以後に「何-X」疑問フレーズが一語化することにより出現したものである。母体である「/何/-X」疑問フレーズ目的語がそもそも後置語順をとっていたため、これらは一貫して後置を保つこととなった。一方、上古の段階で生じていた「何等」「何所」については、発生段階では前置語順であり、中古に至ると順次、後置語順に転じていったが、「何所」のうち場所を問わないもの（「何所〈一場所〉」）だけは前置を保った。この現象は、当該の「何等」「何所」と、後置語順の他の「何X」疑問代詞目的語との意味・語構造・文法機能における相似度の違いが、類推の働く程度に反映された結果であり、他の「何X」疑問代詞目的語との相似度が高いものから順に後置に転じていったと解釈できると指摘している。

第十三章では、第I部の結論として、第九章から第十二章までの内容を整理しつつ、古漢語における疑問目的語の語順変化のメカニズムを提示している。まず語順変化の内実を、(i)同一の疑問代詞目的語の語順変化（＝質的变化）、(ii)後置語順をとる疑問目的語の増加（＝量的変化）、(iii)前置語順をとる疑問目的語およびそれを含む構文の減少（＝量的変化）の三類に大別する。そして(i)に分類される各疑問目的語について、語順変化の言語的背景と語順変化を引き起こした直接の要因を一覧表に示している。さらに(ii) (iii)については、それらが上中古間に発生した古漢語語彙体系の複音節化の趨勢がもたらしたものであると指摘している。以上の疑問目的語語順の質的变化を引き起こした直接的な要因自体は、「統語的曖昧性を回避しようとする欲求」「意味的曖昧性を回避しようとする欲求」或いは「類推」であり、これらは時期に拘わらず、言語体系の中につねに潜在しているものである。そこで、何故に疑問代詞目的語の語順変化が上中古間に生じたのかという問題について議論を進め、疑問目的語の質的な語順変化を促した言語的背景の多くが、*syntagmatic*な側面における複音節化の趨勢、或いは*paradigmatic*な側面における複雑な代詞体系の崩壊という上中古間に生じた二種の言語変化によって、直接的あるいは間接的にもたらされたものであったからであり、量的変化を促した要因も、やはりこれら二種の変化によってもたらされたものであったと結論している。さらにこれら二種の言語変化を、より大きな視点でとらえるならば、「漢語が、上古後期以降、総合的な表現から分析的な表現へという方向で発展した」という漢語の体系的な変化が具現化された現象とみなし得ると主張している。

第十四章はI部の資料篇であり、I部において依拠した主要資料にみえる疑問目的語の語順について、その悉皆調査の結果を示している。すなわち『書経』（西周部分）、『詩経』（西周部分）、『論語』、『孟子』、『戦国縦横家書』、『史記』（秦漢部分）、『中本起経』、『六度集経』（異質部分以外）、『雑宝藏経』、『過去現在因果経』、『遊仙窟』、『伍子胥変文』、『舜子変』、『降魔変文』について、当該の資料にみられる疑問代詞の一覧とその統語的文法分布を表に示した上で、すべての疑問目的語の具体例を挙げている。

II部・第十五章～十八章は、疑問目的語の語順変化と関わる諸問題を論じたものである。

第十五章では、上古漢語の人称代詞に「格屈折」がみとめられるとするB. Karlgrenの学説と、それをめぐる諸家の説をとりあげ、学説史の観点から紹介・論評している。さらに、上古漢語における疑問代詞「誰」「孰」の生起条件の差異を踏まえつつ、この問題についての筆者なりの見通しを示している。

第十六章では、『論語』『孟子』を主資料として、上古中期の否定文における代詞目的語前置現象の生起条件を論じている。具体的には、この現象を代詞目的語が旧情報を担うことを条件として生じた目的語前移であると解釈する説を支持した上で、統語的に前置と後置のいずれも許容される場合、当該の文が非有界的な事態を表す場合は前置語順をとり、有界的な事態を表す場合には後置語順をとるのが原則だとする説を提出している。

第十七章では、三国・呉の康僧会の漢訳仏典『六度集経』の言語について、中古初期の他文献言語よりも通時的に「古い」段階を反映するという特徴が、当時の江南方言を反映しているものか、擬古的な文体に由来するのかを、疑問代詞体系を題材に論じている。そして康僧会が翻訳を行った際、書面語的表現を意識していたものの、自身の口語から乖離した擬古的表現の使用は避けていること、用法のレベルではむしろ三世紀江南方言の口語的な表現を多く反映していることを指摘し、『六度集経』言語の上中古間文法史における位置づけを提示している。

第十八章では、本論文の一連の検討を通じて浮かび上がってきた新旧形式の交替過程に関わる理論的問題の存在を指摘し、今後の本格的な研究の必要性を提起し、本論文の「結び」としている。具体的には、疑問代詞・疑問フレーズの複音節化の進展に関して、①「純粹疑問用法→修辭疑問用法」（まず純粹疑問用法に複音節化が進展し、それから修辭疑問用法に拡散していく傾向）、②「連用修飾語→連体修飾語」（まず連用修飾語用法に複音節化が進展し、それから連体修飾語用法に拡散していく傾向）という二種の「拡散序列」が見出されることを指摘する。さらにこの複音節化の進展の過程において、文体によりその生起が制限される「言語的変異成分」（linguistic variable）に相当する形式がみられることをも指摘する。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、上古(殷～前漢)から中古(後漢魏晉南北朝)にかけて変質した中国語を、疑問目的語の語順変化に焦点を当ててそのメカニズムを分析し、変化の要因とそれらの相互関係の実態を解明しようとする、極めて重厚で意義深い論文である。

本論文は、全14章から成る第I部本論、全4章から成る第II部附論の二部構成を取る。附論に至るまでの全18章それぞれ非常に重要な指摘を含み、各章ごとに審査報告を記すことは困難であるため、ここでは、全体を通じて本論文が達成した成果を大きく三点に分ち、関連する章を示すことで、審査結果の要旨とする。

まず一つ目は、上古から中古にかけて用いられた全ての疑問詞の上古から中古に至る変化形式を、甲乙丙の三種に分類し得たことである。甲類は、少なくとも中古期までは一貫して動詞に前置される疑問目的語で、上古中期・後期からみられる「安」「胡」「何」、中古期に新出した「如」「若」「所」など単音節のものが主体となる。乙類は、上古後期以前は動詞或いは介詞に前置されるものの中古期以降になって後置に転じたもので、「誰」がその典型となる。丙類は、上古後期以降に出現し、一貫して動詞或いは介詞に後置された複音節の疑問目的語で、「何罪」(どんな罪)のように「何」が名詞の修飾語となった「何-X」型フレーズを取るものがその典型となる。本論の第一章から第七章にかけての綿密な議論と網羅的な用例の提示により導かれたこの成果は、第八章でその概要が総括される。膨大な文献資料の綿密な読解と、共時的また通時的な文法解析によって始めて成し遂げうるものであり、本論文の第一の成果と呼ぶに相応しい。さらに論者は、上述の各類について、どのような場合に語順変化が生じ、また生じないのか、そのメカニズムを以下の三つの類型に分けて提示し、その内実を明らかにする。(i) 同一の疑問目的語が前置から後置に変化する「質的变化」、(ii) 後置語順をとる疑問目的語が増加する「量的変化」、(iii) 前置語順をとる疑問目的語およびそれを含む構文が減少するもう一つの「量的変化」、がそれである。これら三類型は、それぞれに対応する言語事実を根拠に導かれるが、特に「質的变化」を引き起こした直接的要因に、統語的また意味的曖昧性を回避しようとする欲求或いは類推が想定されるという指摘は、非常に高い説得力を有す。印欧語に関してVennemann(1974)が提唱した統語的曖昧性による語順変化モデルの中国語における有効性を示し得たと言え、このような観点は、今後、動詞句のみならず名詞句について考察する上でも重要な参照点となるであろう。語順変化のメカニズムとその発生要因については、本論の第九章から第十二章にかけて分析され、第十三章はその総括を示す結論部分であり、これが二つ目の成果である。さらに第十四章は、I部全体を通じての資料集であり、上古の『書経』から今古前期の『降魔変文』にいたるまでの、本論文で取り上げた文献における、疑問目的語悉皆調査の結果を示すものである。ここに列挙される疑問目的語を含む例文は、分類後の類別に従って整理され、出現する全ての疑問代名詞が、主語、動詞目的語、介詞目的語、連用修飾語、連体修飾語、述語、さらに特殊構文のいずれに出現するかを集約した体系表、さらに疑問詞目的語の語順に焦点を当て

て集計した統計表が、全資料ごと個別に付けられる。この章は「付録」と位置づけられるが、論文全体のもう一つの総括とも言うもので、極めて高い資料的価値を有する。最後の三つ目の成果には、早期漢訳仏典が中古漢語の基礎資料として有効性を有することを論証したことが挙げられる。論者は、早期漢訳仏典として『阿闍世王経』、『中本起経』、『仏説義足経』、『六度集経』、『太子須大拏経』、『雑宝蔵経』、『賢愚経』、『過去現在因果経』を扱うが、その中では、『中本起経』『六度集経』を中古前期（後漢～魏晉）の、『雑宝蔵経』『過去現在因果経』を中古後期（南北朝）の主要資料として取り上げる。漢訳仏典は、基本的に翻訳言語であるが故に、文法史資料としての価値を予め確認する必要があると論者は述べ、資料として採録するには、底本である『大正新修大蔵経』所収テキストに、天野山金剛寺所蔵の日本古写本『金剛寺一切経』所収テキストを用いて校勘を加え、さらに『経律異相』中の異文とも校合した上で使用する。例示に当たっては、恣意的に一方のテキストに拠るのではなく、異文にも丁寧な考察を加え、そのテキストが当該文献成立時の字句を保存する程度：「真実性」、基礎方言を反映する度合い：「口語性」、さらに文献の「均質性」に基づいて議論を積み上げる。それにより、これら四種の資料が、十分に文法史研究の資料として使用可能であるということを明らかにするのである。検討の過程で言語の複層性が看取された『六度集経』については、典型的部分と見なしうるA部分のみを資料として用い、異質成分を含むB・C部分は資料とはしない。第二、第三章で示される緻密な資料論は、全編の議論においてもその方針が忠実に守られており、導かれる分析結果との間にも有機的な相関関係が保たれる。なお、『六度集経』については第Ⅱ部「附論」第十七章において再度取り上げ、本文が有する「古い」成分の出現要因を分析し、それが擬古的書面語的表現を用いたものではなく、用法レベルでは三世紀江南方言の口語的表現を多く反映することを指摘し、魅力的な一章となっている。

本論文は、全編を通じて明確な方向性と問題意識に支えられた研究主題のもと、各章が有機的に配置され、各章が一つの命題に統合される構成は見事という他はない。すべての論述は、膨大な資料の綿密な読解によって導かれ、極めて実証的な研究であると評価することができる。加えて、用例すべてに日本語訳が施され、議論の対象となる文法構造が出現する環境と文脈が明示されることも、本論文の説得力を高める堅固な支柱となっている。多大の労力を払って遂行した実証的研究の成果たる本論文が従来の研究を大きく進展させ、斯界に裨益することは疑いを入れない。

もちろん、個別の事象に関しての異論は生ずる可能性を含むが、それも本論文の議論が革新的であるが故のことであり、今後の活発な議論の進展を期待したい。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。令和4年11月26日、調査委員四名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。